

馬誌

戰場部

五十四

和書門			
一	七	三	九
二	三	九	五
函	架	冊	類

武備兵法

內閣文庫			
一	七	三	九
二	三	九	五
函	架	冊	類

內閣文庫	
番號	和 17395
冊數	62(55)
函號	154 455



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





馬誌卷之五十四目錄

戰場部

淺草文庫



澤野信

馬誌卷之五十四目録

馬誌卷之五十四

戰場部

一 馬の厩の内又ハびん出シて乗ぬ前に嘶ハ
 吉事ありまゝと禮に足をりけ乗て後嘶
 り我家を出て一町の内おれハ凶事ありこ
 る糞の事ありをしたるも同然あり其ときハ
 弓を弓手の服に狭きて上帯を結直す
 へー且馬の腹帯も直すへー又馬

の身ふるひするも凶事あり其ときも
腹帯を締め直し上帯をも結直すへ
亦ま物に蹴つきたら上帯を締め直
すへいまもあひる事も忌あり其
ときも上帯を結直すへけ伐軍陣
に限らす遠方へ行ときも回断あり
記

一 慶長十九年十一月廿五日

大津所様茶臼山へ成せらるへ諸大名

又群衆し以歸りの節

將軍様より進せられたる黒粉毛の以
馬より召させらるへしとして以引寄せ相成
い支城の方へ向ひ嚟きいへ敵陣へ向て
嚟く馬の稀あるものありと上帯あり
藤堂和泉守是の吉事の上中上なる是
依て以機嫌よく地道一遍宗二遍召させ
らる諸大名躰踏して見なる作は我等
若き時の馬上して獲るをも合せ獲るの取

たる馬を馬より押へたる事あり是
あるは今の馬よりりさへ乗乗るとの上
意あり和泉守の強執あるはつと感し奉
るあり 大三川志
異本落穂集

一 味方原退口のとき大久保相摸馬よて退
きいを名の忘ぬ誰やらん新十郎殿草臥
以後馬よ乗せて給われと云ほとに戴せ
いひつれいむすとありけ付二人馬よて退
きい殊の外馬草臥いひつる危あき事

一 逢いを古き流見られいてゆらうの時
い何と申すや必ずす二人馬よ乗せぬもの
ありと大久保治右衛門教いよ 三河物語
一 本多平八殿長久よて馬足輕を用ひ中
されいよ弓玉達者を騎兵と一馬足輕
と名付られい 武功雑話

一 忠朝の出馬のとき乗馬乗すまひする事
三度以及ひける忠朝怒りて銜ををら
へと下知しけるけとき三宅軍兵清馬

服よりあがりけるる忠朝より五音あーけられ
いふり作向ひて志のひの緒を結ひ切々
なり彩色せきたるる氣色にて穩らあらず
時より軍兵清練めて云く必らず猪武者
の振舞いあへるへららすと申けれは忠朝あ
さ笑ひて念いや及ふといふ内に一鞭くれ
て進みしるに従者も同く續きけり
九六騷動記

一 大坂復讐陣に真田河内を備もいまも崩

れす出雲守忠朝は大よ怒りて百里といふ
馬に乗りて只一騎備を棄拔る 續武家閑談
太平雜話
一 合戦のとき馬を去離せは必らず備は混乱
して崩るるあり賤ら嶽坂の上の合戦よ
利家の子息利長の備崩れたるも旗本よ
て馬を去離せしゆへ散乱して惣備へ崩
れたるありけしとき今枝宗二といふ旗
奉行討死あり 寛元聞書

一 大坂よて堀尾山城をら茶臼の備を上敷

景勝は長枚原常陸か見て云く堀尾は備
は後より崩るへしこれ裏崩といふものあ
りといひしり果して後より騷き立てけ
り是の馬を近く引付たるを見て馬に
鉄砲の中らんよ馬必らすまぬ合へき
を以て裏崩あつべしと見積りしなりと

そ 續武家閑談
前橋舊藏聞書

一 元和元年五月六日よ井伊掃部頭藤堂和
泉守の人数大勢討死仕ひゆへ七日のゆ

先はあらすは是よよりてまの本多美
濃守よ七日のゆ先を伴付られゆへ美
濃守備よ馬を遠さけるりよきこといふ
事を知るゆへ馬をさけよと自身よ
下知し馬を遠さけさる者いふ討はすへ
しとて長刀を抜杖よつき居ゆゆへつ
と馬を遠さけし丹羽五郎左衛門其所よ
参り見ゆて是は如何やらの事よしてゆや
此合戦よ馬を遠さけては草臥て何とあ

るへきりすんと馬を引付申すへしと申
されいゆへ又馬を呼寄せ申しとてあ
へ集りい前越前勢七十騎ほと乗馬
烟を立て競ひ来りいとて押ちらし押
たてられい浅野采女あとい唯一人よあ
り下くいやれ殿よいとこらかこあ
中内大坂に火のよ見え申しゆへ何の事
もあしよ逢ひ申されすい馬の遠
近にいより人数よよりて心得あるへ

き事よや 寛元聞書

一 大垣の城主戸田肥後守氏西の今の伊勢守の
祖父あり郭屋住のときい龍門といひ入
郭ありてより親父采女正氏信と隔年
に系勤交代あり城下より西の方一里を
りりよ荒尾といふ廣野あり関原の合戦
に勝利ありて
権現様の本陣を居られける獨立の小
山あり岡山といひ其ときより改め

て今ハ勝山といふけ山の邊ありけ荒尾
野にて肥後者三十あまり左門といひ
時鞭打ありー其時分ハ家中に簡略と
いふ事あまよひより三百石以上の馬を持
知行高の者ハ三疋五疋も持しにより家
中に馬数二百五六十もあり近習の者に
ハ城の馬よ乗り騎馬三百餘是を二つよ
分ち一方ハ肥後者一方ハ此舎分け名失念
いこす先祖の足輕二十四組是も四方へ

分け持筒持らるゝ明組は分の足輕をハ城
下の火事其外の用心に残し家中の者町
方の者も家や明て見物よ出へらるゝ家
の人数半分つゝ集るへー重てまゝこ出
し残すものハ見すへーとありさて
其格子を聞に馬上何れも陣羽織よ小袴
や著し大小やさし志あひ一本つゝ腕拔
を入れ糸纒に持そへ上下ともハ袖中
を付る肥後者方ハ赤き九曜星ハ舎分

の市ハ黒を九曜星あり且輕にいゝめ
草の塗立苗木綿の神あし羽織をきせ
肥後ちも綾紬の袴は莫羅紬の陣羽織
赤地に金入の化粧袴朱のさし幣を持給
ふ旗奉行二人旗のもの二組に旗をさしせ西
方へ分りて大將の後に備ふ荒尾野の東
西へ分りてまゝの双方一同に岡の森を揚
る見物何万人といふへこれも共は鯨波
を揚るにより城下までも見えたりと

つゝ其時ハ馬上にて下知を給ひ
以て鉄砲を両方より放りけ後に操
掛りに進み出早合にて輕子をとりひ
七放つ早打あり弓足輕ハ空穂を腰
につけ弓をわいこみ右の自は矢一本つ
持おさめ矢をうけ矢を放らす鉄
砲と同然に進み出る鉄砲終りて物下
知して弓鉄砲ともに閑を退き横を討
如く弓鉄砲ともに備を立て見物する長

柄槍いふは、是輕閑くと双方より馬上に
て乗出り、志あり打あり互に入混り追
付追廻し駈抜け駈遠ひ窮うこに名乗かけ
た、さあふ馬上不達者にて落馬するもあり
馬をいよく乗てもかけ出り或はされつ
立刀或は木の根蔦うつらに躓つそ、窪へ
ふみ込馬倒れて落るもありた、そ落
されて落馬し飛乗て相手を追ふもあり
り汗馬の馳遠ふ体其やうす面白き見

物真の戦場も是に近うるへ、と思ひや
られけるもあり、さて肥後者も此舎第
も諸士と同し事に志あり打あり主人
に向ひて勝負すへきやうあまに、より肥
後者に出合てい乗ぬけ乗遠ふて逃ける
不達者ものい乗付られて馬を叩られ、
者もあり志あり打中時を、り、ありて
金鼓の約束を以て、あ方同時に相引い
ける上、下ともい并當といふ事、いあ、腰

兵糧あり肥後もいもせ芝原に障泥を志
きめんつうの腰兵糧あり茶弁當もあ
く馬柄拘はて野中の水やしくみて柔らる
末この者のいふよ及はす馬にも後輪に付
一糠袋の大豆のひをを喰せめんつうに
て水や吞せける晩景に及ひて機嫌よく
歸り給ふといへり 老士語録

一 元龜二年氏郷十六歳のとき織田金左衛
門尉方よ隠れあき名馬あり諸人は是

を取望する軍多し金左衛門返答よ
は馬を進すへし但し水陣のあるとき
一番よ敵陣へ入り込て高名せんと存
せられい進すへしと申す是よよりて
誰も重ねて取望するものふし然るに
浦は聞及ひて虫に金左衛門もとりは
向ひ重ねての水陣よ先陣やうけ一番に
高名遣よ被すへき旨かしく約束し
ては馬を乞請たり十日解り過て武田

信玄東より濃より出張して烈しき事をなす
事ありしは氏郷の馬に打交先陣に進
み武田方より斥候も出たる敵と出合
引組て落首をとりて高名し血もまみれ
て信長公の山前より出られたり金左衛門
も高名の首を見せ約束を違へざる
旨を語られしより信長公を始めとして
皆舌をまきて称美せられける雑話筆記

一

夏陣の五月六日水野隼人正組松平

助十郎勝信り中けるは今日の一番は誰
もあはるへらす我あはるへらすといふ水野
多富中けるは口廣き事ちあ誰り其方
まうりよ一番さすへきそや助十郎又
曰く各よく叟給へ今度組中一番の馬
は其り馬あり上田吉久重秀り弟子
よて大坪流免状をなしたる者我あり
一番の衆人一番の志あれ我より先を
めぐる者いあはるまうりよといひける果

して一番に突出し敵陣に馳入精ある討
死を遂るあり同組より平松平庄九郎
忠一大島左太夫光盛山崎助次郎梁田
平七同平十郎競て戦死す續武家閑談
一 高田より今町より陣取ありて諸方より
目付申其外大名申作合され相濟て
城下へ内人数は城内より一左右あるま
て四五のつち稲荷の社内より床机を居
えられ夫より大車へ向ひて行列より

越遊いされけるに通町より見物多く出
町人百姓第一高田浪人共立つて内人数
も通りりね内先人数の差支けるを跡右
衆に見ては用の妨けする者とも一
打拂ひ通すへとして十文字の旗を引付
勢を勵まより下知事よりけられとも見
物の者も道を開きんとすれとも後より
強て押けれは如何ともすへまやうあ
難儀に見えける其上浪人共口より我

浪人ありむさとしいしたる事被さ
れましといひけるに歩み目付も跡難儀
しけりさらし馬交を以て急散させよと
し事成しりや夫も如何ありし
し引落されしして先きの騎馬侍引落
されしと沙汰あるへし不詮相ひ馬を牽
せよとて刎馬を二三疋より取多く付て
真先へ牽たるに大勢の中へ馬いれて
刎相ひけるもそ皆て轉ひ倒れて片付

けるまの其跡へ候し人数引續きて行
しとりやをある機轉の仕方と噂しけり

見聞隨筆

一 清水太郎左衛門母の力を誇り大力の名を
得しりいりしとき太郎左衛門甲斐黒し
し馬や一疋持一日に大豆を一斗くらふ
悪馬あるゆへ愛ものあり馬屋の内を出
すしに中間六七人にて綱を付てひき出
す鞍置事ありす太郎左衛門は馬に飛の

り鞭を打て走るとそそ股よて志むれは立
所よ血を吐て死す太郎左衛門蛇ありと
も綱を付て棄へしとあしうて軍陣
のとき用立中へそそやと荒言を吐しと
ありお條五代記

一 肥前龍造寺の住人勝山左近ハ其力九國
ハ雙ふものあり或とき國中に隠れあ
そは強き馬あり是を棄よ平みて駈
出る是を引て留むるよはそけ血流るれ

ともぬまらすして城門の濳りを駈入
んとす額くくりの上の横木よ當らハ
たまらしと思ひし綱を放ちまぬ濳り
の上の横木よかけ股を以て棄たる馬を
一しめしめければ口足を縮めて志め揚
られ物を縫しし形の如しこれを見る
もの舌を振ひ其強勢を畏れける碎玉話
下同
一 信長美濃國を去て其勇力強智謀の名の
るものを多く扶持せしるる美濃先

降流といふ其中は稲葉氏江安藤を勝
れとりとす稲葉は又其最一と称せり
信長紀伊の雜賀孫一助同若左衛門兄
弟に説て降らしめんとす則ち使を
るに使取らす其殺さるゝや取めらるゝ
やの間いよいよ分明ありす信長重ねて稲
葉伊豫ちい余す稲葉則ち彼地は往て
とくは孫一助若左衛門の速くは信長は
降り尾張は入りて幕下に属するの

礼をあすけとて信長の孫一助に問て曰
く初めの使をい如何せし孫一助答て曰く
臣これを殺す信長曰く何の故は是を殺
すや孫一助曰くその人騎歩多く引つ
れ兼て案内をも通せず馬は乗あら
ぬは城門を叩き信長の使を稱して驕
れる色あり謀て臣を擄殺せんとする
ものありと成し殊は其礼失敬と思ひ
本丸と二の丸の間は入るとして門を閉前

後より入込て盡く討果し信長曰く
然らば何の故に稲葉を殺さざるや
孫一郎曰く稲葉は其初めの使と大に
異ありまの五六間前より案内を慫慂
にひ信長の使として来るは槽の上
りて是を見れば馬鞍をもひさらす城
門の外より馬より下立徐ろ歩み来
る是こそ礼義を知れりと信大は感し
自身門を開きて出逢へ内は招き入て

に牒を聞は義理明らりしりてありも恭敬
あり股引のちられより見れば布の下帯
をとりこれ則ち身を儉しして専ら
武道の志を用ゆるあるへし良士の風
あるよ化せられて今帰服せりといふ
一 秀吉二十餘万の大軍を督撰して小條氏
政氏直入朝せざる罪を討んとして天正
十八年三月下旬沼津に宿陣す小早川左
衛門佐隆景の従兵は河田八助權崎十兵

清とて大力の名を顯はしたる者あり
り八助の大指物十兵衛十八段の母衣を
ひけて通る秀吉遙く見て使番を以て
其姓名を問せらるる命を承りて乗付馬
上より主將の作せよ各の姓名を中さ
れよといふ三士顧て返答あり力及を
す馳歸りて斯く中せし秀吉さては汝
下馬あきて名のれといひたるあらん
清教書あり常するら或は兩陣勝負

にわける時其折よ佛神の前よても下
馬せぬ作法ありとありては何そ人よ勝
れたる大指物をさし普通に超ゆる母
衣を懸たる士は下馬あきやそれ無礼
あり返答せぬこそ理りありとて傳入
を以て下馬して問せらるれは三士も亦下
馬して各其姓名をいふ
一 伊達政宗卿よ清作法いふも尋らせられ
すよといひて幾度も水を飲られしよ

一 水は産ふとて水徒流を以て供中へ
作下されよと水は召何れもへ下さる
下よもたへさせ馬の口をも洗ひせし
へと作られ如何ある水急その路次よ
てもその取は馬を立させられ下こ
小者まへ水を下され息を吐つらせし
て馬は召されし物して幾度馬は
召されしよも年徳の方へ馬の尻を向
せられしやうよあされし自身は綱

を引結び細き綱にて馬を召し是
とても軍陣の水作法を思召し遊ばされ
いと皆人々あり難く存しなるあり命期集
一 延寶五年のころ酒井修理大夫忠直仔細
ありて関門にてをませし家士も中
付らるし馬は一日二日置ほしよよ
口をさせよと宣ふ家老とも中すし
當時水漬のおりら如何と申す修理大
夫中さるし関門の公辺の水掟あり只

今よも何事そといへ一方を防ぎ固
るに忠義あり馬久しく口を入されし
悪し我乗り料勿論家中物取れり
馬のそたらき成りぬいて不忠あり
やうの取れし心を附る事第一の慎みあり
と申されければ老臣も皆感服す
謙亭
筆記

一 真田豆州或とき老申塙田加剛へ招請せ
らる外の事いふて只馬のみは念入

られ早馬駿馬多りりきされとも見
事とまうりやさるるおよ三寸まうり
の芦毛の太く道しきり四人ぬに馳出
りいさしてよき具足下地といひて賞美
す亭まやさるるいふ老人を顧みす辛
勞いさし招請いさす事いさやうある
金言を承るへきためあり上への
奉公よも成ゆる猶一言も承度よ
申され深更まで武の物語よて退去

ありありとあり 續武家閑談

一 西山公常々此咄あさるるに馬の尻下りよ
て後足の足低くしり用前よりよしを野
足り馬の歩み馴たる足並あれは平生も
野足りよしとて拍子の馬の更には好ま
されず専ら武用よのみは心掛ありて勿
論筋あし舒へし事ハ第一不仁の至り用
筋のとそ役よ立ぬ儀ありと此制よあ
されし西山遺事

一 宗輝松平周防守 諸侍へ作聞られしは高直ある

馬身上よ似合す飼ひし事ハ無用あり生
もの事死したる時に重ねて馬を求
むる事成難くは武用の心掛をも缺へ
し爪よし四調かんてうさへよけれはやすきを
求め油断あし持れ中すへしと常々中
合られしよしまは馬すきよて早朝
以馬を登へし出あされしまは侍元馬
登りて度々此目見もせしよし 聞見集

一 細川越中守源重賢馬を好み給ふ事
世に勝れて草創ひ口の取やうよて委
ちろし召たりされとも駿足をい求め
られす常し宣ひける馬の軍用の為
れに其性し任せてまこらそよさを第
一とす業もたよよけれに縦ひ驚馬あり
ともそ生れ付たるほと業の出るもの
あり業も桃尻あらに駿足も用ありさ
れに我も其馬の程こよ従ひて性分を盡

させん事をのみんとすれに馬の善悪の
さまよと思ひすとして代金貳拾あよ過たる
をい求め給ひさりしりとも皆足色をり

しりりしとそ

根葉遺文

一 水野故監物忠善の五万石よて家中に馬
五百五十疋ほとあり二十人扶持百石以
上の飼料を出し馬を持あり常し性
還節し變事あるとさし馬の口付を業
て残を持せて出るあり予り知れるも

の極極最兵衛といふ浪人百石にて抱ら
れりるり馬を持つ其親父清休とて七十
まうりあるり肥前宮原陣にて首尾あ
りりと聞給ひ極老の者を呼出し清太
夫とあらとぬ二十人扶持給はり是も馬
持りり他所にて少しよても武士道の
意地を立浪人したるといふものを抱
へられりり五六百石取るもの馬二疋
千石とるもの三四疋も持ありたり

餘の應事を止めて人と馬の多きを事を
好まれけるといへり 老士語録

一 土井大炊頭へ堀田が賀者小身の時分にか
されし私儀殊外馬に数寄あ不斷馬にか
りりて居中ひかやうに仕度ひく奉公
の妨にあるへくと迷惑のよし中され
しへ大炊頭作られし馬は数寄ひ
よし一疋の事よし公儀の仕用にも立
中すへそとあり其以後大身にあり中

されしとき大炊殿へ申されしは私小身
のとき馬に教寄しへとも大身に成し
てより隙も是あり最前の如く馬に教
寄申さすしよー申されしへ大炊殿
申しは最前の如く馬に教寄あされ
すしよー一役の儀より産しよーあり
夫れつぎ加賀守申さるるは最前馬に
教寄しよー申しへ一役の儀と仰られ
今又最前の如く馬に教寄申さすしよ

ー申しへ同く一役の事と仰られし事
合点仕らすしよー申されし大炊殿仰
られしは小身の時の馬に教寄馬上にて侍
用立しつぎをむと申し大身のとき馬
に教寄是ありとてもよき馬多くし
産しよつぎ一役の儀と申換授ありと

そ 寛元聞書

一 慶長五年八月廿一日河田の渡りを越て
波阜より向ふとき極尾信濃守忠氏川

岸より陣せらる。池田家の先陣の士大将
伊木清兵衛忠次使をも以て川を渡すに
つゝ池田り者共川より打入て後渡されし
へ今度の先陣の池田り承りしるるまで
いとそ中ける。忠氏聞て暫く馬より下
り立て吾下知を待れしへと云われけれ
し山田多門兵衛十五歳軍のりふそ始て
ありしと馬より下んとするを従者馬
より下る事やし鞍の前輪より付てら

つ伏しありて待せられよと教へしりし
山田志りたりけるにやありて忠
氏の旗本は法螺の響せしりし吾先よと
馬よ乗りしりし山田真先よ川より打入て涉
りけるり遂に一番首をえたるは従者の
物馴しる故ありりり常山紀談

一 阿部忠秋急の侍用よりて山城より並に高
崎へは越成されし此とき俄の事ゆへは
供の面より跡より追て罷越しよ平田

彈右邊の唯一人馬上にて高崎まで乗つ
けひよ―折―も雪降り厳寒よつぎ
將軍家作りの雪ゆへ豊後守いさそ那後
すへきよ―あり例よ相詰られひ流
以清よ上意の如く迷惑はるへくさり
あらら其身の乗物よて強越ひる寒氣を
凌ぎひいんと中上られひ更以の外に機
嫌悪―く誰り免―ひて駕籠よ乗ひや
と以立腹遊ひされひよ―間もあく以

歸府よて以用向首尾よ―作上られ以
退座の取又清前へ召させられ乗輿以
の外よ思召されひむね候て以呵り是
ありひよ―是より清用向の以弁―ひ
へとも以言葉掛り中さす至極以迷惑
あされひ其後隅田川へ成せられ還清
のとき駒形堂よ寄せられ清輿居り
以馬方年若の面よ―淺草川を馬よて
渡―ひやう作出され別ち上覧ありて

乘込く川を渡しこの時の忠秋は馬
頼りよつては支配の面にも乗込はと
ころ清目よとまり本意あらすのは不
審を蒙らせられは不肯尾よはへ重
ねて何等の儀も是ありはつて夫までと
思召切清前より二町ほど川下へ乗込は
誰そと尋ねはへとも豊後ちと各
弾りひて中上すは変あれは豊後にては
あきら水不抜練にて危あは早船

を寄ひやういと上意ありて清前より
各中達しは徒は小人を馳走て早船を
出しはやう中觸船を漕出しは変其内
よ恙あは川を乗越しありて上覧よ
入らる向より船よてはもとり直し清
前へは出はへは清機嫌は快然にて清の
ねくは懇よあらせられはよ
石道夜話
一 元大将の馬を擇ふよ心得あるへそよや
甲斐の武田家よて米澤といひしもの

奥州より往て馬を求るとそ信玄一首の和歌を書て興へらる

上驛の中の驛こそ大将の

家へき馬と去れやものぬ

信玄五十疋の馬の中より軍より奪られし馬は目足栗毛中候とて只二疋あり甲斐の山梨郡とりのとらふ取の百姓は目足を養ひ畜しを米澤見て又あき馬ありと信玄より中て五十貫の地を興へては

馬を信玄より奉りぬ今泰平久くありて馬を擇ふの理を知る人あはく益あそ觀美し黄金を費す事もありぬ是皆上より下に至るまで軍旅より明らあらぬやへあり

常山紀談
諸將物語

...侍立一方の御
...御入らる。

上野の中御殿より大將の

...考れやものね

...御入らる。

...御入らる。

...御入らる。

...御入らる。

...御入らる。

大分

御入

